

無職転生 —静After—

メダカの子

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは無職転生の二次創作小説です。

第22章 青年期 組織編

第二百三十七話「ナナホシの行末」

において、転移魔法陣の実験が成功し、現実世界へと戻ってきた七星 静のその後を筆者の想像により書いたものです。

「まだ読んでない！」という方は、ぜひ本編をお読みになられてからこちらを読まれた方が分かりやすいと思われると思います。

現在、小説、漫画版も発刊されているのでぜひぜひ

登場する人物、団体の名前は現実のものとは一切関係がありません。

また、キャラが崩壊している部分が多々ありますが、そこは皆様の妄想で修正を入れていただけると幸いです。

感想お待ちしております。

PS、自分の見落として静の両親を他界させてしまったことに深く謝罪申し上げます。

一応の修正しました。

素晴らしき原作さま

無職転生 | 異世界行ったら本気だす |

http://ncode.syosetu.com/n9669
bk/

続編もあるので要チェックです。

目次

帰還編

第一話「成功」	1
第二話「思い出」	16
第三話「兄」	33
第四話「それぞれの想い」	50
第五話「再会」	64

帰還編

第一話「成功」

パラレルワールドという言葉を知っているだろうか。平行世界。異世界。御伽噺のような世界。すべての平行世界が現実とようなものとは限らない。

もしも人間以外の種族が存在していたら…
もしも魔法が使えたら…

そんな世界に迷い込んだ、一人の少女の話。

とある草原地帯。

その上空には甲龍王ペルギウスの城《空中要塞ケイオスブレイカー》が浮かんでいた。

実際はプカプカ浮かんでいるだけのお城。

しかし、その光景は、近づくものに威圧感を与え、空からすべてを見渡せるという権力の強さを示しているようだった。

場所は変わり、空中要塞ケイオスブレイカー内部。

地下15階のエントランスホール。

多くの機械が運び込まれたその場所では、いつもはあまり怒鳴らないペルギウス様が怒声をあげていた。

「ルーデウス！魔力が足りないぞ！もっと送れ！」

空間転移実験。

この世界では禁忌とされている転移魔法を使い、自分の世界へと帰るための実験だ。

私が居るのは、部屋の中心部の床に描かれえている転移魔方陣の上。

じっと、実験が行われるその時を待っていた。

ふと部屋の端を見る。

機材の前ではルーデウスが必死に手をかざしていた。

「送ってますよー！」

上手くないのかなのだろうか。

声からは焦りが感じ取れる。

彼なりに必死に頑張っているのだろうか。

「くっ、このままでは…。」

ペルギウス様も慌てていた。

その声が聞こえた時、私はふと思った。

(ああ、今回は失敗かな)

実験にはよくあることだ。

また次だ。次頑張ればいい。

そう思った時、魔法陣は光り輝きだした。

*

——黒木 誠司——

12月半ば。

雪が降る肌寒い季節になった。

だが俺はいつも通りにそこへ向かう。

周りには白い壁。機械音だけが鳴り響く静かな空間。
その部屋のベットには一人の少女が眠っていた。

七星 静。

それが彼女の名前だった。

整った顔に綺麗な長い髪。

はたから見れば素直にかわいいといえる容姿。

それらを全て兼ねそろえていた、俺らの自慢の幼なじみだった。

彼女の顔を覗き込み、いつものように話しかける。

「今日も寒いね」

しかし、返事は帰ってこない。

少し顔を眺めた後、窓際の花瓶の水を変えて、椅子に座り本を読んだりして時間を過ごす。

これが俺の日課だった。

彼女が病院に搬送されたあの日から、俺は一日たりとも欠かさずに来ている。

雨の日も風の日も。雪が大降りになった日でさえも必ず行く。

しばらくして、足に何かが落ちてきた。

「ふっふっふ」

どうやら本を読んでいる最中に寝落ちしたらしい。

重いまぶたを擦りつつ顔を上げると、彼女が目を覚ましていた。

こちらに目を向けている。

驚きのあまりに、思わず大きな声をあげてしまった。

「お、おい！静！

お前っ… うっ…」

どれくらいの間彼女を待った事だろうか。

涙が止まらない。

手で拭っても拭っても、あふれ出てくる。

俺がもつとしっかりしてなきやいけないってのに。

「やっど、やっどがえっでぎだあ」

俺はわんわん泣いた。

目覚めた彼女はうつろな目を開けながらも必死に周りを見ている。

この場所がどこなのだろうか、そんな疑問に満ち溢れた顔をした。

やがて、また俺に目を向け、口を開ける。

「*****!!」

なんて言ってるのだろうか、よく聞き取れない。

「*え*****あ…」

多分、舌が回っていないのだろう。

長い間眠っていたのだから、無理もないはずだ。

「お帰り」

久しぶりに出た涙を拭ってからそう告げると、彼女の顔はみるみる笑顔になっていく。

俺はこの笑顔が好きだった。否、今でも好きだ。

「ただいま」

また涙が出そうだ。

またこうして彼女と会話をしていることがこんなにも嬉しいなんて。

彼女は言葉を続ける。

「そう、やったのね」

だが、その笑顔は瞬時に終わりを告げた。

「？」

「いや、なんでもないわ。それより私はどのくらいの間眠ってたの？」

淡々と真顔で喋っていく彼女。

意識不明の重体に陥ってからもう三ヶ月は経っていた。

そのことを告げると「たった三ヶ月…」と驚いていた。

髪の毛は伸び、酷く疲れたような顔をしていても彼女は彼女だった。

俺の好きだった七星 静。

何一つ変わらない。

はずだ

だが何かおかしい、以前の彼女とは違うような気がするのだ。

あれだけの重症で、目覚めた時ににこんなにも冷静な人が居るのだろうか。

普通は混乱すると思う。

もしかすると、頭の打ちどころが悪くて逆に冷静なまままでいられる

のかもしれない。

あとで医者に聞いてみよう。

「やけに冷静なんだな」

「そうかしら。私は生きてることに驚いているわよ?」

冗談めかしてそんなことを言う。

「まあ、俺も二人がトラックに引かれた時は死を目の当たりにしたよ。大切な人が二人も失われていく絶望感ってやつもね」

「でも生きてた... あの人には感謝しないとね」

運が良かったのかもね、と少し笑いながら話しをする彼女に頷き返す。

「そういえば誠司、秋人は? アキはどうしたの?」

篠原秋人、俺の親友であり、静の彼氏だったやつだ。

今はもう...

「死んだよ、トラックに引かれた次の日に。」

俺は誰かが助けてくれたらしいけど、秋人と静は重症で、助けてくれた人は即死だったらしい...

そして、秋人は静より重症だったらしくてね。次の日には死んだよ。」

「そう...」

友人の突然の死は俺の心に突き刺さった。

「まったく、あいつ勝手に先に行きやがって... ホント馬鹿だよな」
「そう、よね...」

彼女は悲しそうな顔をしていた。でも泣かない。

彼氏が死んだつてのに涙一つ流さない。

まるで死んでいることを既に知っていたかのように。

パンツ！と頬を打ち、気持ちを切り替える。

彼女はこちらを見て目をまん丸くしているが気にしない。

今は喜ぶべきだ。

俺は彼女と話をしている。

話すことができるのだ。

「ねえ、私が眠っているこの三ヶ月の間に何かあった？」

「そうだな・・・」

思い出すと確かに色々あった。

二学期はイベントの多い学期である。

体育祭に文化祭、そして、もう少しすればクリスマスである。

「文化祭は私も出たかったわ」

文化祭では、クラスの出し物としてメイド喫茶をした。

彼女もメイド役として出るのは知っていたので、秋人と二人で楽しみをしていた。

「俺も楽しみにしてたんだよね」

「なによもう・・・自分は楽しんできたくせに」

すねる彼女もまたいちだんと可愛い。

「ああ、すまない」

確かに楽しかった。でも凄く楽しかったとは言えない。
三人でいろんなところを回ったかった。
雑談しながら、笑いあいながら行きかけたかった。

「少し、寒いわね」

「ああもう冬だしな」

外を見ると雪が降っていた。
音もなく、シンシンと。

「雪、懐かしいわね」

彼女が唐突に呟いたその言葉は、俺の鼓動を早まらせた。

なぜだろうか。

やはり彼女はおかしいのかもしれない。

“ここは冬に雪など珍しくもないはずだ”

たった三ヶ月で「珍しい」などと言う人は居ないと思う。
もしかしたら、記憶のどこかが無くなっているのかも知れない。

「なあ」

「あつ、そうそう」

俺の疑問は彼女の声によって遮られる。

「この手紙をある人に渡ってきて欲しいの」

そう告げた彼女はベットのの中から二通の手紙を取り出し、一通を渡してきた。

「これは？」

「ある人から頼まれてね。住所と宛名は書いてあるはずだから、そこに持って行ってくれないかしら？」

「なんで？」

そりやそうだ、なぜ俺が持つていく必要があるのだ。

郵便屋にでも頼めばいいのに。

「託されたものだからね。本当は自分で行きたかったんだけど、この体だと時間がかかっちゃうじゃない？代わりに行ってももらえたらなあって」

「そう、か・・・」

どうやら手渡さなければならぬらしい。

だが俺の頭の中ではいくつもの疑問が生まれた。

“なぜ手紙があるのか”

“いつ書いたのか”

“誰から頼まれたのか”

今聞いても答えてくれないだろう。

この疑問は後から聞くことにして、先に手紙を渡しに行くことにした。

「渡した後に、私が会って話がしたいことも伝えてくれないかしら？」

「うん、わかった。他には？」

「んー、ないわ。」

そして体を起こそうとしたが上がらなかつたのか、少し頬を赤くしてこちらを向く。

「お願いします」

「はいよ」

「ありがとうね」

笑顔で告げられる。

やはり彼女の笑顔は美しいな。

それを見ることができたことだけでも十分な理由になった。
そして、その住所へと向かった。

*

——七星 静——

セイが部屋を出たのと同時に小さくガッツポーズをした。

実験は成功した。

嬉しかった。

「やってくれるじゃない！」

正直な所、成功するとは思ってなかった。

成功したとしても死んでると思っていたのだ。

それか、世界のどこかに転移して日本に帰れなかった可能性だっ
てあった。

もしもお腹のところにはぽっかりと穴があいていたらと思うと恐怖
で震えが止まらない。

だが、こうして生きている。

元の自分の体に戻り、こうして誠司に会えている。

ルーデウスには感謝してもしれきれないだろう。

でもアキはやはり死んでいた。

転移しても長生きはできないだろうと思っていたけど…

「アキ…」

彼とはよく口喧嘩をしていた。

幼馴染ということもあり、お互い好きだったということもあった。最後に彼と話したのがちよつとした口喧嘩だなんて…

「なんで私より先に死んでるのよ… バカあ…」

今頃涙が出てくる。

さつきセイに言われたときは、あまり真実を受け止めていなかったのか涙が出てこなかった。

「勝手なんだから…」

いつも三人で歩いて帰ったあの時間はもう戻らない。

アキとセイがバカなことやってる姿も見ることができない。だが泣いている暇などないのだ。

生きているこの命、大切にしなければならぬ。

ひとときしり泣き終えたあと、今後の方針について考える。

「さて、これからどうしようかしら」

両親は今家にいるはずだ。とりあえず、連絡を取ることにした。

そばに置いてあった自分の携帯で家に電話をする。

少し長めのコールの後、電話に出たのはおばあちゃんであった。

「もしもし、七星ですが」

「私です。静です。」

「おばあちゃん？お母さん家にいない？」

「・・・ 静？おお、静かい？」

「目が覚めたんだね？良かったわ」

「本当に良かった」と電話越しで泣いているおばあちゃん。

しかし、私の疑問は晴れない。

いつもこの時間ならお母さんが電話に出るはずだ。

「ねえおばあちゃん。」

「お母さんやお父さんは？今に家にいないの？」

「なにを、何を言ってるんだい？」

ゾツと背筋に冷たさを感じた。

なにかおかしい。

嫌な予感しかしない。

「お母さんだよ？いないの？」

「忘れてしまったのかい？もしかして、記憶喪失ってやつなのかい？」

「いや、私の記憶は間違っていないよ。」

「忘れてなんかいない。忘れるわけじゃない！」

ついカツとなる。熱い。頭に血が上っているのだろう。

「そう・・・ よくお聞き。」

「あんたの両親、つまり息子と奥さんはね、10年前の事故で死んでいるんだよ」

「え・・・」

あの日、私が事故にあって転生した日。

確かに両親はいた。

何不自由ない家庭だった。

「だって、だってそんな…。」

そんな訳ない、そう思っていた。

いつもの家族や友達がいる世界に帰れると。

そして、帰ってきたと思っていた。

「うん。うん。おばあちゃん。

また電話するね」

おばあちゃんとの電話を切る。

おばあちゃんの話だと、どうやら前の世界と違うのは両親のことだけらしい。

他のことは前と大差ない気がした。

そうか、ここが私が前にいた世界ではないのか。

「こんなにも不幸が続くのね。

これも運命なのかしら」

何も考えたくない。

少し眠りにつくことにした。

*

目を開けて外を眺めると、すでに日は落ちていた。

だいぶ寝てしまっていたらしい。

切り替えなきゃ…

ここは前にいた現実とは違う。

でも、それでも帰ってきたことに代わりはないのだから。

「そうね。まずは…」

これからの生活についてどうしようかしら。

一応バイトをしていたお金があるはずだがいずれは足りなくなるだろう。

ふと気づき、もう一通の手紙を取り出す。

「これで少しでも長生き出来ればいいのだけれど」

ルーデウスから貰ったものだ。

生活が危なくなったら使おうと思う。

まあいわば切り札のようなものね。

「でもこれ、『彼女にお金をあげてください』とかだったらホントに貰えるのかしら。

見ず知らずの子にお金とかあげる人って、なかなかいないわよね…。」

うん。

とりあえず、退院まではリハビリとこれまでのことを書き記していると思う。

世間的にはフィクションとして、私の中ではノンフィクションとして

「それにしても夢みたいな日々だったわね。

夢だったとは言えないけれども」

笑えてくる。

おとぎ話のような世界で過ごしてきた日々が現実だなんて。

「さて、まずはあの日ね」

向こうの世界にトリップしたあの日。

絶望の中、一筋の光を見つけたあの日。

私は携帯を起動させ、メモ帳に文字を打っていった。

第二話「思い出」

時は事故当日へと遡る

——黒木 誠司——

9月の初め。

そう、あの時はいつものように三人で帰っていた時だった。

その日は始業式。

夏が終わりをつけ、いつもより少し肌寒い日が始まろうとしていた。

「だから言ったじゃない！」

彼女、七星 静は怒っていた。

雨に

「天気予報では降るって言ってたから持っていこうとするのに、なにが『こんな晴れてんのに降るわけないだろ？あほか』よ！思いっきり降ってるじゃないの！」

ねえホント馬鹿なの?!馬鹿じゃないの?!」

「いや、だからそれは知らなかったんだって！」

必死に言い訳してるのは篠原 秋人。

俺の親友であり、静の彼氏である。

ここは俺が助け舟でも出すか。

「ま、まあそのへんで…。ほら雨も強くなってるから急ごうぜ？」

「ちよっと黙ってて!!」

額に汗を浮かべて、必死に。

まるで何かの焦りがあるかのように思える走り方だった。

「おいー！」

二人に注意を呼びかけようとして前を向くと、秋人が静を抱いていた。

力強く、離さないように

「どうした?」

その時だった。

太い腕が伸びてきて、俺の襟首を引っ張っていった。

ぐんっ！

視界が急激に変わり、体が硬い何かに叩きつけられる。

「痛っ…。」

どうやらコンクリートの壁に飛ばされたようだ。

「おいーおま」

さっきのデブだろう。

そいつに違いはない。

そう思い文句を言おうと顔を上げて気づいた。

トラックが迫ってきていた。

そして、トラックの前にあのデブが、その後ろには二人がいた。

「…!!」

言葉を発しようとしたが遅かった。

ドンツツ!!!

鈍い音が聞こえたと同時に三人ははねられていた。

デブが一番前にいたおかげか、二人の体はトラックの進路の外には
じき出されるように飛んで行った。

そして俺らを庇ってくれたデブはトラックの進行方向に飛ばされ
ている。

トラックは止まらない。止まるわけがない。

「やめろおおおお!!!」

力の限り叫ぶ。

体が痛い、そんなの気にしない。

だがその声が届くはずもなく、聞こえてはいけない音が聞こえたよ
うな気がした。

コンクリートに飛び散る血、肉塊。

そして俺の意識はそこで途絶えた。

*

次の日の午後、俺は目を覚ました。

鼻の奥にツーン、と消毒液のにおいがする。病院だ。

医師は、命に別状はなく、怪我もしていないことをすごく驚いていた。

「これは奇跡ですね」

そう言われ、退院が決まった。

だが俺は納得できなかった。

(奇跡なんかじゃないのに)

俺はあの人がいなければ死んでいた。

あの人が必死だったのは、俺らに身の危険が迫っていたからだと思う。

(家族の人にお礼しないとね)

あの状況で生きていたら奇跡だ。

それこそ、俺なんかと比べることのできないくらいなの。

三人の安否を確認すべく、受付に向かう。

受付の看護師に二人ともこの病院で入院していると聞いたので行くことにした。

あの後、通りかかった人が救急車を呼んでくれたらしい。

もつとも、あの太っていた人は即死だったらしく、家族も葬式をしなかったという。

「よほど嫌われてたのかな」

そんなことを呟きつつ秋人の病室まで来た。

「誠司です。失礼します」

どうぞ、中から聞こえてきたので入った。
そこには秋人の家族全員と学校の担任がいた。
皆黙って下を向いている。

「おい…。」

秋人を見ると何もないベットで横たわっていた。
点滴も、心拍数を測定する機械も何一つなかった。

「なあ、秋人。もう起きてもいいんだぜ？なあ、なんか言えよ」

こいつが何も答えてくれないことはわかっていた。
俺も言いたいことはいろいろあった。

「なあ！お前が静を守っていくんじゃないのかよ！なんでそんなに早く死んじゃうんだよ！」

いつもいつもそうやって勝手に先に行くし！ふざけんよ！」

どんなに叫んでも、俺の声以外の声が聞こえることはない。

ああ、理不尽だ。

ゲームじゃないからやり直しもできないもんな。
喪失感ってこんな感じなのかな。

「…おばさん、秋人はいつ死にましたか？」

「…午前中よ」

俺の目が覚める前だったのか。

「あいつは…あいつは勇敢でしたよ。」

自分の命より彼女を助けて、あいつが何もしなければ静も死んでい
たでしょう。」

あの人のことはあえて言わない。

これがこの場での最善の答えだと思ったからだ。

「そう、ありがとうね誠司君。あの子の最後を見ていてくれて。」

そう告げたおばさんは泣き始めた。

「あの子は、あの子はまだ若いのに！なんで親より先に行っちゃうの
よ！

なんで死んじやったのよお・・・」

死。

その言葉が心に突き刺さる。

こんなにも身近な人が死ぬとは思ってなかった。

あいつらとはずっと一緒にいれると思っていた。

おばさんに続き、秋人の家族が次々に泣いていく。

場の空気に耐えられなくなった俺はその場を去った。

次は静の部屋に行こう。

死んでいない。死んでいてほしくない。

そんな思いが俺を駆り立てる。

早足で静の病室に向かった。

「誠司です。失礼します。」

今度は何も言われない。だが俺はそんなのを無視して入っていく。
静の病室は秋人と違って静以外に誰一人いなかった。

無論、その理由も知っているし、別に驚くほどでもない。
多分、静のおばあちゃんはもう帰ったのだろう。

「静!!」

俺はすぐさま静のベットへと走る。

たくさんの機械につながれている彼女は、まだ目を覚ましていなかった。

「良かった…生きてる」

彼女はまだ意識不明だが生きている。

その事実が、ただただ嬉しかった。

「秋人、恨むなよ」

俺は、彼女の手を握りしめた。

「秋人が守ったこの命。今度は俺が守ろう」

そう胸に誓い、彼女がいつ目覚めてもいいようにこの病室に通うことにした。

次の日からは学校に通いだした。

一人で登校し、何事もなく過ごし、一人で帰る。

周りにいつもの二人がいない。

俺の胸にはぽっかりと大きな穴が開いているようだった。

そして帰り際に、病院により静の病室へと向かう。

日が落ちたら帰る。

そんな毎日だった。

苦しくはなかった。
辛くもなかった。

でも、そんな負の感情に飲み込まれるのは嫌だった。

*

月日が流れ、体育祭が始まった。

もともと体を動かすのが好きな俺は100m走に出ることにした。
いざ自分の番が来たとき、俺は隣のやつに注意を向けた。

津田 理玖。サッカー部のキーパーをしている。

だが足は速く、プレイヤーとしても活躍できる将来有望の選手だった。

(秋人と同じくらいの速さだっけ)

秋人には負けられない

そう思うと不思議と力が出る。

「位置について、よーい…：パンツ」

号砲とともに足に力をこめ、スタートダッシュで差をつける。

だが理玖は早かった。他走者を抜いていきトップに着く。

直線では勝てる見込みがない。

(カーブは貰った！)

理玖の後ろにぴったりとついて行った俺は得意のカーブで理玖を
追い抜き、再び直線へ。

そのまま風を切るように走り、僅差で一位を取った。

「よし！」

「誠司はえーよ！」

「俺も負けてばかりだったからな」

初めて負けたーと悔しがってる友人とともにゴール裏へとまわる。

「先輩！おめでとうございます！」

裏にまわった俺に順位カードを持ってきた女の子は可愛かった。

俺が独断と偏見で、一番可愛いのを10だとするとあの女の子は

9。

なかなかである。

「早かったですね！見てましたよ！」

「ああ、ありがとう」

「い、いえいえ！」

照れながら去っていく女の子は頬が赤かったように見えた。

「あの子もしかして… お前のこと狙ってたりしてな！」

「いや、流星にないでしょ」

「あるって！」

「だから…」

「なら俺、貰うよ」

「へ？」

さっきの子が気に入ったらしく、理玖はさっそく口説きに行った。
走っていた時よりも速いスピードで向かう。

(あいつ… 本気で走れば俺より早いのかよ…)

手加減していたのは分かっていたが、ここまで早いとは知らなかった。

だが、走り切った達成感か、不思議と悪い気持ちはしない。

(さてと、次の競技に向けて準備しないとな)

そう思った俺は、自分の団のテントへと足を向けた。

その一週間後、文化祭が始まった。

正直行きたくなかった。

行く意味など無いようにに思っていた。

あんなに三人で楽しみにしていた文化祭を、自分一人で楽しめるわけがないと思っていたからだ。

「今日は休もう」

そう思い、二度目の眠りにつこうと思っていた矢先、一通のメールが届いた。

『先輩！今日お暇でしたら私とまわりませんか？』

「これは…」

メールの送信者はあの時の女の子であった。

名前を御堂 香織。俺は香織ちゃんと呼んでいる。

クラスや学年でもモテるらしく、なぜ俺に気があるのかよくわからない。

ただ悪い子じゃないことは確かだ。

どうやら体育祭の後、俺のクラス的女子から聞いてきたらしい(ち

なみに理玖は速攻でフラれた。

今では週に何度かメールを交わしているくらいだ。

「行く意味…できちゃったな。まあ、せっかく誘われたんだしね」

結局行くことにした。

学校につくと朝から活気だっていた。

校門から校舎までの間には各部活動の出店が並んでおり、せっせと準備をしている。

文化祭が開始されるのは九時。

特に用事のない俺は教室で本を読んで過ごした。

そしてそのあと、体育館で開会宣言があつた。

体育館では同じクラスのやつらがやけに盛り上がっている。

「なあ、お前今日どこから行く?」

「そりやあもう三年四組のメイド喫茶つしよ!」

「え?二組のにやんにやん喫茶じゃないの?」

「いやいや、お前から何言ってるの?一組の女王様喫茶しかないよな?あんなの行くしかないよな!!!」

「「お前…」」

おいおい、喫茶店多すぎだろ…

しかも女王喫茶とか、一部の人間にしか需要無いと思うんだけど…

てか四組、なんで三組の俺らと同じメイド喫茶なんだよ

…

あれ?そしたら全部喫茶店じゃん?

三年を回るのはやめておこう。
そう香織ちゃんに伝えておかなければ。
体育館から出た俺は、集合場所へと向かう。
たしか、屋上だったはずだ。

屋上につくと先客がいた。

「あ！先輩！」

香織ちゃんが笑顔のままこちらに向かってくる。

眩しい。その笑顔は眩しいよ。

「早いんだな」

「ええ、自分から声をかけたのに遅れるわけにはいきませんから」

えっへん！と胸を（ないが）張ってドヤ顔を決める。

「今日のスケジュールは私に決めさせていただきます。終わった後に感想を聞きますからね？」

しっかりと準備しておいてくださいね！」

「ああ、三年以外を頼む」

「きーこえーませーん」

「いや、だから、喫茶店以外をだな…」

「何か言いました？」

笑顔のままそう告げた彼女は「さあ、行きましょう！」と俺の手を引いて目的地へと向かっていった。

楽しかった文化祭が終わり、帰路に立っていた俺のもとに彼女が走ってきた。

彼女とはつい先ほど別れたばかりだった。

「はあ… はあ…」

「どうした？そんなに慌てて」

「せ、先輩」

ふーっと深呼吸をして一言

「今日はすごく楽しかったです。いつもみたいに変な目で見てくる人もいなくて、自由に遊べました。」

「それは良かった」

自分の行いが他の人に幸せを与えるのならそれでいい。
それは自分にとっても嬉しいことだった。

「あの… 私、先輩に会ったあの時から…」

「香織ちゃん…」

「毎日が楽しくなったような気がします。気のせいかもしれませんが」

「香織ちゃん…？」

「嘘ですよ」

「好きです。付き合ってください」

時の流れが止まっているかのようだった。

風も止み、鈍感主人公おなじみの「え？なんて言ったの？」も通じない。

風さん！そこちゃんと仕事して!!!

「…」

「先輩…？」

「その返事はあとでするから、ついて来るか？」

「どこへ？」

「いいからいいから」

「？」

彼女の手を引き、俺はそのまま病院へと向かった。
静の病室に入ると、彼女は動きを止めた。

「先輩、この人って…。」

「ああ、お前も知ってるだろ？あの事件の被害者だよ。」

そして俺の親友の彼女であり、幼馴染でもある「

…。」

「俺はさ、親友が守ったこの命を今度は俺が守ろうと思うんだ。だから君と付き合うことはできない。ごめん」
でも告白してくれたのは嬉しかったよ。ありがとう。」

はたから見ればくさいセリフだ。

でも俺にはこれ以上の断る理由がなかった。

でも、本当は付き合いがかった。

初めて自分に好意を抱いてくれた人だったからだ。

しかし、複雑な感情が俺の中では渦巻いていた。

「そうですか…。」

悔しいような、嬉しいような、複雑な感じですね」

「嬉しい？」

「だって先輩は私のことを嫌ってるわけではないのでしょ？付き合い合えないのはそれ以上の理由があったから。フラれてもこんなにすがすがしい気分なのは自分でもびつくりです」

彼女はいつもポジティブだった。

目の周りには涙が溜まっている。

多分俺の前では泣かず、誰にも見られないところで泣くのだろう。

「あ、あとから頼んでもオツケーって言わないんですからね！」

「ああ」

「後悔しても遅いんですからね！」

「ああ」

ぐずっ。と鼻をすする。

「私の初恋が先輩で良かったです」

その時の彼女の笑顔は一生忘れないだろう。

凄く幸せそうな笑顔だった。

こうして、俺に訪れそうだった春も見事に去って行った。

*

今、香織ちゃんとは、たまに話し合う仲で落ち着いた。

今日は「バスケット部のあの人がつこよくないですか？付き合ってみた
いですね」などと恋の相談に乗っている。

実ればいいけどな。

確か、あいつ彼女持ちだったと思うけど。

「くっくっく」

「なんですか？その笑いは」

「いや、なんでも」

俺がこうやって笑えるのは香織ちゃんのおかげだな。

そうして帰りはいつものように病院へ向かう。

静のりハビリの手伝いでもしようかな、そう思いつつ。

第三話「兄」

病院を出て40分歩いたのだろうか。
雪はどんどん強くなっている。

「寒いな」

コートを羽織り直し、マフラーを少しきつめに巻く。

周りを見渡すと見覚えのある風景が目映る。

三人でよく行ったシヨツピングモール。

小学校の頃、秋人が野球を練習していた球場。

俺らに通っている高校。

もちろんそれは、ここがいつも歩いている通学路だからだ。

指定された住所は、ちょうど帰り道。

俺は迷うことなく、目的地にたどり着いた。

「……か」

辿り着いて家を見上げる。

手紙に書いてあった場所には、大きな二階建ての家が建っていた。

(そういえば……)

ここに来るときに一つ思ったことがある。

それは”俺らが事故にあったところから歩いてすぐそこにある”
ということだ。

何かの縁なのか。

それとも偶然なのか。

(偶然って怖いな)

改めて名前を確認する。

この宛名の高橋 俊樹（たかはし としき）とは一体誰なのか。そして、静は差出人とどんな関係なのか。

（あいつ、何か知ってるんなら隠さなくてもいいのにな…）

まだ静の信用を勝ち取っていない自分が悔しい。

とりあえず、手紙を渡すことにした。

インターホンを鳴らそうとドアに近づくと、中からは笑い声が聞こえてきた。

今は夕暮れ。

時間的にはゴールデンタイムで、面白い番組が放送されているだろう。

（幸せな家庭だな）

ピンポン。

インターホンを鳴らす。

カメラとマイク付きのインターホンだ。

「ごめんください」

すると、家の中の人から返事が来た。

「どなたですか？」

「高橋さん宛に手紙を渡しに来ました」

「わかりました。すぐ行きます」

いい人そうだった。

今の声の人が高橋 俊樹さんなのだろうか。
どんな人なのだろうか。

「こんにちははる寒い中ご苦勞様です。

ってあれ？学生さん？」

中から出てきた人は格好よかった。

この声でこの容姿。

学生時代とか相当モテてただろうな

神様許すまじ

「はい、友人から高橋さん宛に手紙を渡されました」

「友人？どなたですか？」

「ええっと、七星 静というんですが」

「七星？… いや、知らない人ですね。間違えたりしてませんか？」

間違えてる？そんなはずはないだろうけど。

「いや、ここであつてと思うんですけど…」

「そうですか、とりあえず手紙見せてもらえませんか？」

「はい、どうぞ」

そう言つて手紙を差し出す。

表には『高橋 俊樹様』と住所が書いてある。

裏には何も書いていなかった。

「確かにうち宛ですね。ですが、静さんってだれでしたっけ？」

うーむ… と考え込んでいる。

無論、俺に聞かれても困る。

てつきり知り合いかと思っていたがそうではないらしい。

「一度、中を見てもよろしいですか？」

「ええ、構いませんよ？」というか、高橋さんのですからお気になさらず」

「そうでしたね」

笑いながら手紙を開けた。

だが手紙を取出し、差出人の名前を見たとき、高橋さんの表情が固まった。

顔が笑っていない。

「おい」

「あの…： どうかなきいました？」

そう問いかけると、あの人は睨みつけるような顔をしてこつち向いた。

俺がMっ気のある女の子ならこれだけで昇天できるだろう。

「雅人…：」

呟いた言葉は重みがあるようだった。

でも俺はそんな名前の人と静との関係も知らない。

つい、好奇心のあまり聞いてしまった。

「誰ですか？その人」

「俺の弟で、前にあった事故で死んだやつだ」

「え？そんな」

はずは…： と言いかけて肩をつかまれる。

高橋さんの目は「お前を逃さない」とでも言っているようだ。

さっさと帰ればよかったと、この時後悔した。

「この手紙はどこから持ってきた？」

*

——高橋 俊樹——

学生が持ってきた手紙を見たときは、正直間違えたのだろうと思っ
た。

七星 静なんて名前聞いたこともないし、そんな人を見かけたこと
もなかった。

だが俺はこの手紙を今すぐにでも見たかった。

具体的な根拠はないが、わざわざ子供が持つてくるものだ。
郵便屋を使わない理由があるのかもしれない。
もしかして俺へのラブレターだったりしてな。

そんな馬鹿なことを思いつつ手紙を開いた。

「おい」

なんだこれは。

なんで、

なんで差出人の名前が…

「雅人…」

弟だった。高橋 雅人（たかはし まさと）。

でもあいつは死んでいたはず。

それに遺書か何かを残すような奴でもない。

(なんであいつからの手紙が今頃来るんだ?)

ああ、ダメだ。

あいつの事を思い出すだけで怒りが込み上がる。

社会のクズ

穀潰し

ニート

まさしくこれだ。

一家の面汚しで親の葬式にも来なかった。

そんでもって家で自慰行為ときた。

いかれてやがる。

だから追い出した。

親の遺書に『私が死んだあとは俊樹に家を譲る』と書いてあったから、このうちは俺のもんだ。

あの時俺は、家に張り付く害虫を一刻も早く駆除したかった。

「この手紙はどこから持ってきた」

少年に問い詰めることにした。

彼の肩をつかみ、逃げられないようにする。

あいつが生きているはずはないと思っていた。

だが、こうして手紙が渡されている。

「君は誰から、渡してきて、と頼まれたんだっけ?」

家族に聞こえないように耳元でささやく。
彼は酷くおびえているようだったが気にしない。

「し、静。七星 静です」

「その子は今どこに？」

「病院に入院しています」

七星 静か。覚えておこう。

「今日はもう遅いし、明日は土曜日だから話を聞きに行こうかな？」

「そ、そうですか。彼女にもそう伝えておきますね」

これで明日、いろいろなことが聞けそうだ。

聞いている途中でキレそうだけど。

「宜しく頼むよ」

「はい。それでは失礼します」

振り返り、遠ざかっていく少年を見送る。

今日は手紙を読むだけでいいか。

そう思っただけの中へ入っていった。

「あなた、話長かったのね？郵便屋さんじゃなかったの？」

妻が優しく聞いてくる。

そのおかげで、さっきの怒りはどこかえ消えてしまった。

「ああ、近くの老人らしい。通りかかったついでに寄ったそうだな。
ついつい長話をしてしまったんだ」

「あら？知り合いの方？」

「昔からお世話になってる人だよ。それこそ、子供の時から」

「へえ〜」

自然と嘘をついてしまった。

俺らの結婚式の時には雅人を呼ばなかった。

あんな奴が一緒の家族だと思われたくなかったし、妻にも見てほしくなかったからだ。

だから知らなくていい。

最初からいなかったことにすればいい。

今回の件も俺一人でやるべきだ。

そう思った。

手紙もポケットに隠している。

みんなが寝静まってから読み始めればいいだろう。

「さてと、腹減ったから飯くおうっと」

家族団欒が再開した。

夜の10時。

全員が寝静まったのを確認し、一人ソファで手紙を広げる。

手紙は全部で4枚。

あいつがこんなものを書くはずないだろうと思っていたが、筆跡はどうみてもあいつの字だった。

「さて、読み始めますか」

コーヒーを片手に持ち、静かに文章を読んでいた。

短いようでなかなか長い4枚の手紙。

全部読み終わるのにたつぷり一時間はかかった。

まあ、もともと字を読むのは早い方ではないんだけどね。

「なんだこれ…」

だが、読み終えた俺の口からはこの言葉しか出てこなかった。文章の内容はふざけてるとしか言いようがないほどに。

「バカにしてんのかあいつ。死んでも俺をイライラさせやがる」

剣と魔法？

ふざけるな

なにが転生だ

なにが魔法使いだ

なにが結婚しましただ

「死ぬ間際に書いたのがこれかよ。期待は…少しはしたんだがな」

そりゃ少しは期待する。一応兄なのだから。

一応、な。

4枚のうちの3枚はこんなどうでもいいような話ばかりだった。

近況報告とか書いてあったが、ただの妄想じゃねーかよ。

家を追い出されてからこんなことを書いて許されるとでも思ってるのだろうか。

「反省文は最後の1枚だけか」

親の葬式については書いてあった。

行かなかったことを後悔しているとか、帰ってこないことはこんなにも辛いだとか。

「どの面下げて言ってるんだよ」

部屋から出てこなくて家に居座り。

親に迷惑をかけまくった挙句、その親が死んだ後に気づく？
笑わせんなよ。

「でも、最後の文章は気になるな」

最後にはこんな文章が綴られていた。

『こんなことを書いても信じてもらえないでしょう。無理に信じろ
とは言いません。』

ですが、これだけはお願いです。ナナホシという人の名前を聞いた
ら会ってください。

彼女は全てを知っています。

俺らに何があったのか。そしてそこで何をしてきたのか。

そしてあなたは知っているはずです。七星 静という女の子を』

あの少年が言った名前だ。

明日会うことになっている。

「七星…ねえ…」

確かにどこかで聞いたような名前だが、よく思い出せない。

とりあえず明日だ。明日に全てわかる。

「そろそろ寝ようかな」

寝室に向かった。

*

次の日の午前。

俺は指定された病院に着いた、が

「割と近いな」

車で7分。

うちの子供のことでお世話になったりしている病院だった。
そして病室に向かう。

三階の205号室、そこが彼女の病室らしい。

「高橋と申します。話を伺いに来ました。入ってもよろしいですか？」

「どうぞ」

中からは可愛らしい声が聞こえてきた。

ああ、可愛い子だったら妻に嫉妬されそうだ。

「失礼します」

そう言っただけに入った瞬間に言われた。

「やっぱりだ！お久しぶりです！俊樹おじさん！」
「え？」

ふと顔を上げると、相手の子はこっちをじっと見つめてくる。
その目はキラキラと輝いていた。

「えっと...」

「覚えていませんか？静ですよ。七星 静」

「いや...」

「うーん。あ、これなら覚えてそうですね。お母さんの名前は七星峰子です」

七星 峰子。峰子。峰子。峰k…

「あー峰子さんか！」

思い出した。妻と仲良かった人の名前が峰子さんだ。

妻が「峰子さん」と呼んでいたから、苗字は知らなかったな。

だいぶ昔に、峰子さんと娘さんが前住んでいたうちに来て遊んでいたこともあつたけ。

「それにしても大きくなつたね」

峰子さんとその主人がなくなって約10年。

車の衝突事故らしい。7歳で両親を亡くしたのはすごく辛かっただろう。

「そうですか？おじさんは全く変わってなくてわかりやすかったですよ」

笑いながらそんなことを言う。

昔から笑顔が似合う少女だったが、こんな美少女になるとはね…
峰子さんも大喜びだろうよ。

「そうか、君だったか」

「ええ」

「それじゃ、本題に戻すよ。君は一体何を知っているんだい？」

彼女の口から告げられる言葉を少し信じてみようと思った。

*

彼女の話は手紙の内容と類似していた。

「なんだよ… 一体どういうことだよ!」

「そのまんまの意味です。何一つ嘘はついてません」

つい熱くなった。

「あんな話が実在したというのか?!」

「そうです」

「君もあいつもその世界で過ごしていたというのか?!」

「はい。向こうでは『サイレント・セブンスター』として生活していました」

もう訳がわからん。

こんな話が真実なわけがない。

でも、なぜ二人とも同じことを言う?

口裏を合わせていたわけではなさそうだが、こうも一致するのはおかしい。

俺があまりにも否定するせいか、彼女は「はあ」とため息をついて、

「少し考えてみてください」

「… なにをだよ」

彼女の口から出た言葉は俺も考えたことの一つだった。

「“どうして家を追い出されてから数分後に死んだのに手紙があるんですか?”」

「まさか、遺書書いていたと思っっているんですか?”」

真面目な顔をしてそんなことを言われる。

でもな・・・そんなことがあるわけが・・・

・・・

いや、あつたんだ。

もしも遺書を書いていたらおかしい。

親の葬式の日に死んだからな。

「わかった。静ちゃんとあいつの話信じよう。

でもそんなことがあつたなら、それは凄いことじゃないのか？

トラベラー？っていうのかな？そんな感じで世界的に有名になれるんじゃないのか？」

そうだ。異世界に行つて、帰還できたのならそれは人類初ともいえる快挙だ。

「このことを公開すれば？」と彼女に聞いた。

「いや、こんな話を信じてくれるのは俊樹さんくらいですよ」

「そうか？」

「それこそ、中二病だとか言われるんでしょうね」

中二病は聞いたことがある。

確か、中学二年生の思春期の時期に多く見られる現象だ。

妄想が激しくなり、現実と妄想の区別がつかなくなる子供もいると
言う。

恐ろしい病気だ。

しかし彼女の話は妄想ではない。

事実、このことを知っているのは、彼女と俺とあいつだけ。

「そうだな。これは黙っておこうか」

「そうですね。ですが・・・」

「ん？どうかした？」

「いえ、それが・・・」

そう言っただけで彼女は携帯を見せてきた。

なにやらメモ帳が開かれており、そこには

「え？」

文字の羅列。

内容を読んでいくと、それは異世界のことについて書かれていた。

「もう、書いてしまっているんですよ。色々と」

「これは、小説？」

「ええ、書き残そうかと思いましたが。」

今はまだ、広めようとは思ってないのですが、そのうちネット上にも上げようかなと」

なるほど。これなら本当っぽく書いても誰も疑わないだろう。

「いいんじゃないのか？」

「え？ですがさつき・・・」

「ああ、あのことは俺が思っただけだから気にしなくてもいいよ。書きたいと思った時に書かないと、あとからは書く気なんて起こらないだろうし」

「そうですね」

それから今のうちの状況や、昔の思い出、妻と峰子さんの学生時代について話をしていた。

彼女の方は、最近家の妻と峰子さんが話していたような口ぶりだっ

たのだが、それは考えすぎだろう。

多分、昔の思い出を最近っぽく言ったのだろう。」

「さて、そろそろ帰るよ」

「もうですか?」

もう、と言われても今は午後5時。

気づけば6時間近くここにいたことになる。

「遅くまでごめんね」

「いえいえ!母の話や昔のことが聞けて良かったです!」

「俺も君と話せてよかったよ」

「私です!またいらしてくださいね。それか、私が伺いに行きます」

またねくと手を振りつつ病室を去る。

下に降りようとしてエレベーターのボタンを押す。

上がってきたエレベーターから出てきたのは、昨日の少年だった。

「あ、君」

「あ、昨日の!」

昨日は悪いことをした。謝らなければ。

「昨日はすまなかったね。少し怒ったような言い方をして」

すると少年は、そんなこと言われるとは思ってもなかったかのよう
に目を丸くした。

「ほあ?!いい、いえいえ!全然これっぽちもそんなこと思ってませんで
したよ?!」

だ、大丈夫だろうか。

「そうか。まあ僕は帰るよ。ではまた」

「は、はい！それではまた！」

そう言つて少年と場所を入れ替わる。

扉が閉まる前に見た少年の後ろ姿は、うちで見た時よりも軽い足取りだった。

エレベーターは一階へと着き、俺は自分の車へと向かった。

「妻が知ったらなんていうだろうな。今日のこと」

妻が関係していたのなら話は別だ。

昨日と今日のこととはしっかりと話をしよう。

(半信半疑だろうが、一応は信じてくれるだろう…)

そんなことを思い、俺は車を走らせた。

第四話 「それぞれの想い」

リハビリを始めて一週間が過ぎようとしていた。

もうすぐクリスマス。

だが私は、足がまだちゃんと歩ける状態ではなく、お医者さんにもクリスマスも病室で過ごすことを告げられていた。

そのことをセイに告げると、すごく張り切った感じで、

「じゃあ俺が！ずっとそばにいてやんよー！」

って言っただけどころかで聞いたようなセリフだったわね。

でも居てくれるのはありがたい。

クリスマス一人とかルーデウスに知られたら、絶対「ぼっち乙」と言われるわよね。

あいつ一夫多妻の大家族だったし…

なんか無性にイライラしてきた。

「憂さ晴らしにリハビリでもしてこよう」

二階のリハビリルームに向かうことにした。

今日は一人で歩く。いつもの看護師さんは別の人の病室にいつてるらしい。

周りに人はいなく、少しさびしい。

いつもはセイが来てくれるのだけど、今日は少し遅くなるみたい。

「あぁ〜！暇だぁ〜!!」

暇暇暇アアア!!!

…ハッ!

危ない危ない。危うく発狂するところだったわ。

気持ちを落ち着かせ、リハビリを続ける。

両手で手すりを握り、右足、左足と交互に足を踏み出す。

「っん！..！」

足が重い。

私が眠っていた三ヶ月という間は短いように思っていたが、元々あまりない筋肉はもつと衰えていた。

必死に動かそうとするがなかなか上手くない。

「まあ、頑張るしかないよね」

そう自分に言い聞かせ、ノルマクリアを目指す。

一日5000歩。これでもきつい方だ。

(今日はいつもより少しでも多く歩こう)

顔を上げ、足に力をこめた。

その日の午後。

病室にセイがやって来た。

「来たよー」

病室のドアがあくのと同時に、少し高めの声で入ってきた。

病室に来るのがそんなに嬉しいのかしら。

「いらっしやー」

で静かに過ごす予定だった。

お医者さんにも「安静に」と言われてたしね。
そういう予定だったはずなのに

「外に出ること、医者に許可とつたぜ」

いつも通りの時間に来たセイは、開口一番にそんなことを言った。

「え？・え？」

急に言われて頭の中が真っ白になる。

なんで許可が降りたのかもわからないし、今年は諦めていたのがまさか行けると言われるとは思っていなかった。

いやでも、それは…

「そういう嘘はいらな」

「本当だよ」

私の言葉を遮ってセイが続ける。

「本当なんだよ。」

医者は知ってたんだよ。静がずっと頑張ったこと、知ってたんだよ」

「…」

「ひたすら前を向いて歩いている姿を皆知ってる。

毎日ノルマを上げていったことも知ってる。ちなみに今は一日10000歩だろ？俺だつて知ってるさ」

何も言えなかった。

急なことで少しパニックになっていたが、話してる内容は自然と耳に入ってきた。

それで余計に何も言えなかったのだ。

「そう…今年、クリスマスにどうしても行きたいところがあったから、そこに行きたかったの」

「うん」

「行けるとは思ってたから来年でもいいやって、そう思ってたの。」

でもやっぱり今年じゃないといけない気がするんだ。

アキが居なくなっちゃった今年じゃないと」

「そう、なら今すぐ行こうよ。」

大事な場所なんですよ？そこは」

「うん！」

外は雪が降っているので厚着をしていこう。

すると、「ほら」とセイが肩を貸してくる。

「こういう時は男の役目ってね」

「いらぬわよ別に、松葉杖有るんだし」

そう言つて先に病室を出る。

セイは、「松葉杖…」と言いながらじつと私の松葉杖を覗んでいるようだった。

二人で並んで外に出ると、雪は思っていたよりも降ってなく、言葉で表すならば『しんしん』とそんな感じであった。

「さて、行きますか」

スタスタと、器用に松葉杖を使いながら目的地に歩いていく私にセイは口を開いた。

「そういえば、行きたいところってどこ？」
「決まってるじゃない。アキのお墓参りよ」
「なるほど。そりゃあそうか」

アキは確かに向こうの世界にもいた。でも、私より先に死んでしまっていた。

同じだ。この世界と同じ。

結局は、私より先に死んでしまう運命だったのかもしれない。だからこそ、動けるなら一番先にアキに会いに行きたかった。たとえ死んでしまってもアキはあそこにいる。

絶対に。

「それで、どこにあるの？」

セイはずっと知っていたのか、少し笑いながら反対方向を指さした。

「早く言いなさいよね」

「あっはっは！…って、え？そこで怒られるの俺？」

「ほら、行くわよ」

「ふふっ」と少し笑いながら空いている片方の腕でセイの腕を引っ張り、もう一度目的地へと足を進めた。

*

静に腕を引つ張ってもらいながら拗ねた顔をしていた俺は、内心凄く嬉しかった。

今までなんとなく距離を置かれていた気がしていた。

だが、この頃の静は笑顔に嘘はなく、心から笑っているように見えるからだ。

しばらく歩いていると、場所は商店街に差し掛かってきた。

「綺麗だな」

「ええ、そうね」

「まあ、秋人のお墓参りもそうなんだが、俺は静ちゃんをここに連れてきたかったのさ」

「どうして？」

「病院ってどちらかというと質素な色合いでしょ？たまにはカラフルな彩りを見せたくてね」

「うん。ありがとう！嬉しいわ」

彼女は喜んでくれた。

この商店街のイルミネーションは毎年頑張っている。

去年はあまり気にしていなかったが、よく見ると本当に綺麗でつい足を止めてしまう。

「わあ」

彼女の方も口を閉めることを忘れたまま上を見上げている。

商店街に立ち並んでいる全ての木に綺麗な色合いで飾り付けされていて、これを目的に他県から来る人もいるらしい。

今まで気にしていなかった分、毎年これを見れるのかと思うとちよつと嬉しい。

「さ、暗くなる前に早く行こうか」

腕時計を見ると、時間は午後四時を指している。

この時期にもなると、六時ごろには真っ暗になるときもあるので、早めに行っておきたい。

「もう少しだけ見ておきたいなあ」

しかし、彼女の方はまだ動きそうになかった。

「きつと夜に見たらもつと綺麗だよ」

「お、そっちのほうも楽しみかも！」

「だろ？だから明るいうちに秋人に会っておこうぜ」

「わかったわ」

そしてまた歩き出す。

商店街を抜けて十分くらい歩くと目的の場所についた。

お墓だ。

「あ」

先にその場所にいた人はこちらを向いて話しかけてきた。

「お久しぶりね、静ちゃん」

秋人のお母さんであった。

もちろん偶然ではなく、俺が目的地を聞いた後に電話をして来てもらった。

「え？秋人のお母さん？あ、お久しぶりです」

彼女の方も、なぜここに秋人のお母さんが居るのか分からず、少し

緊張しているようだった。

「すみません、おばさん。クリスマスなのに来てもらって
「いいのよ別に。私も話したいこととかあったから」

横から肩を叩かれ、「ちよつと、どういふことか説明しなさいよ」と
小声で言われるが、無視をしておく

「ごめんね、静ちゃん。これは私が言い出したことなの」
「え？」

「秋人はね、ずっとあなたのことを想ってたの。」

自分がもうすぐ死ぬっていうときにも『あいつは無事だったのか
？』って聞いてきてね…

私が『あなたが助けたのよ』っていうと『良かった』って
すごく幸せそうな顔をしていたわ。親の私でも初めて見たくらい
にね…」

「そうでしたか…」

「すみません！私の… 私のせいでアキを… うっ…」

そうか、彼女が最初暗かったのは秋人がいなくなつて辛いという感
情だけでなく、自分のせいで死なせてしまった、って抱え込んでいた
からなのか。

俺は何にも知らなかったんだな。本当に何も

「違うのよ」

おばさんが発した言葉は彼女の泣いてうつむいていた顔を上に向
かせた。

「私はそんなことを言うために来たんじゃないのよ」

「それならどうして…」

「ごめんなさい」

この一言は、彼女のみならず俺まで驚いてしまった。

「ずっと謝りたかったのよ。それこそ、秋人の前で」

どういふことか分からない。まだ頭が混乱している。

「私、いや、私たち夫婦はあの子を亡くしてから一度もあなたのお見舞いに行けなかった」

「あっ……」

「いえ、正式には行かなかったのよ。」

忘れたとかそういうことじゃなくてね、純粹に行こうという気持ちはあったのに行動に移せなかったのよ」

「でも、でもそれは普通じゃないんですか？

自分の子を死なせて生き残ってしまった、もう一人の子に対する憎しみってあると思いますよ」

確かに親ならその感情はあるだろうな。ま、俺は場合によるけど。

「ええ、少なからずその感情はあるわ」

「なら」

「ならお見舞いに行かないの？違うわ。それは違う」

ああ、そうか。おばさんは分かったのか、秋人の想いが。

「あの子がね、命を懸けて守ったあなたのことを憎んでしまった自分たちに非があるの。」

確かにあの子は死んでしまったわ。もういない

でもね、あなたがいる。あの子が守ったあなたがいる。」

秋人の死は決して無駄じゃなく、一人の命を救ったのだ。
それをあの夫婦は現実に受け止めることができた、ということだろ
う。

「だから、これだけ言わせて

生きていてありがとう。元気な姿を見れて嬉しいわ」

「うわあああん」

彼女はおばさんに抱き着いていった。

見ていたこっちも泣きたくなくなる。熱くなった目頭を押さえ上を向
いていることにした。

それから女性二人は数十分の間、秋人の話をしては泣いて、という
行動を繰り返していた。

「ぐすつ。ん、そろそろアキにあいさつしなきゃね。無視されてい
怒っているだろうし」

「じゃあ、私もそろそろ帰るわ。夫が帰ってくる頃だろうし」

「はい、今日はありがとうございました。お話しできてよかったです」

「私もよ、静ちゃん。今度夫と二人でお見舞い行くわね」

「はい！楽しみに待っています！」

「さようなら」と手を振りつつおばさんを見送った俺らは、本題で
ある秋人のお墓に足を運んだ。

「先にやるね」

「うん」

手でお墓の雪を払いつつ、線香をあげる。

「よう、秋人。元気にしてるか？」

今ちようどクリスマスでな、あの時よりもっと寒くなってるよ。

まあ、風邪はひかないように気をつけるよ。また来るね」

ほい、と彼女に残りの線香とライターを渡す。

彼女は残った線香全部に火をつけ、供えていった。

「アキ、助けてくれてありがとう。」

本当はちゃんと会って話したかったんだけど、こんな形でごめんね。

でもあなたのおかげで私がいる。この命、無駄にしないで生きていくわ。

だからね、ちゃんと見ていなさいよ！

私もまた来るわ。じゃあね」

そう言った彼女は、後ろを振り返り歩き出した。

急いで駆け寄る。

「もういいのか？まだ居ても良かったんだぞ？」

「いいのよ。話せただけでも嬉しかったわ。」

セイも連れてきてくれてありがとうね」

「おう」

薄暗くなった空を少し眺めて、俺は決意した。

彼女を好きだという感情。これは口に出さないのでおこう。

一番最初の気持ちのように、あいつのかわりに俺が守ろう。それでいいんだ。

「どうかしたの」

立ち止まった俺を見て、心配したようだ。

「いや、なんでもない。さ、戻るか」

「そうね」

俺らは、イルミネーションがより一層綺麗になったであろう商店街へ向かっていった。

*

——七星 静——

来た時より綺麗に見えるイルミネーションの下を通りながらふと思った。

「そういうえば、もうそろそろ戻った方がいいんじゃない？」

若干暗くなってきたところだし、先生も心配するだろう。

しかし、セイは「大丈夫、大丈夫」といいつつ

「最後に、ここに行こうって決めていた場所があったんだよね」

と言つて、行きとは逆に彼に腕を引っ張られる形となった。

彼が連れて行ってくれた場所は商店街の近くにある時計台であった。

ここからの景色は昔から好きだったのを覚えている。

「ほら、商店街みてみ。」

下から見るのと違って、こつちもいいだろ？」

「わあ」

本日二回目の「わあ」が出た。

でも声が出るほど綺麗だった。下からだと自分の視界いっぱい

埋め尽くされていたイルミネーションはちっぽけに見えるが、住宅街の明かりも雪がいい具合に反射してより一層綺麗に見える。

今日一日だけですごく多くのことがあった。

「なにからなにまで、今日は本当にありがとうございます」

「おう、喜んでもらえて何よりだよ！

またこういうの企画してもいいか？」

「ええ、あなたが苦じゃなければお願いするわ」

「よшきた！任せろ！」

セイには返しきれないような恩ができちゃったな。

本当にいい友達を持ったわ。ありがとう神様。

「ぎ、今度は本当に帰りますか」

「そうね。帰りましょうか」

そういつて病院に帰ることにした。

次の日、病院の先生から「昨日はもう少し早く帰って来るように、君の友達には言っておいたんだけどなあ」という出だしの説教タイムが朝から始まった。

「何が大丈夫よ」

これはきつく言っておかないとね。

そう思つて、お医者さんの話を右から左へ受け流していった。

第五話 「再会」

プルルルル、プルルルル…

プルルルル、プルルルル…

「んー。なによ…こんな朝から…」

私は枕元の携帯を開く。

まだ朝の6時、良い子は寝ている時間だ。

電話の相手を見ると、黒木 誠司とでている。
仕方なく電話に出ることにした。

「はい、もしもし」

「あ、やっと出た！おはよう！」

朝っぱらからそのハイテンションはついていけないわよ。
ふあ…とあくびを一つして相手に告げる。

「あのさ」

「そういえば今日って…ってなに？」

「おやすみ」

言ったと同時に通話を切る。

ごめんなさい。悪気はないのよ、全然。

ついでにマナーモードにしておく。完璧ね。

「さて、もうひと眠りしますかね」

そして、私の意識は深い闇の底へ落ちて…
いかなかった。

「うーん。セイは何を言おうとしていたのかしら」

不覚にも、何のために連絡してきたのか気になって眠気が覚めてしまったのである。

何度も瞼を閉じて寝ようとするが、なかなか寝付けない。仕方なく、真剣に考えることにした。

「今日って何かあったっけ？」

壁に掛けられているカレンダーを見る。まだ12月のカレンダーだ。

クリスマスからは一週間くらいしか経っていない。

(ん？クリスマスから一週間？)

それと12月のカレンダー… あっ！)

最初から携帯の日付を見ればよかった。うん。ちゃんと書いてある。

「そうか、今日は元旦だったのね」

1月1日。午前6時。

セイは元旦のあいさつをしたかったのだ。そう思ったら自分の行動が申し訳なくなってきた。

「急いでかけなおさなきゃ」

電話帳を開き、セイの電話番号へかける。

プルルルル

「はい、黒木ですが」

なんとまあ、ワンコールで出てきた。

「さすが現代高校生ね。早いわ。」

「おはよう、セイ。さっきは電話切ってごめんね。」

「それと、明けましておめでとう」

「あ、うん、え？」

「聞こえなかったの？明けましておめでとうって」

「お、おう。こちらこそ明けましておめでとう」

「どうやら彼の方は、急な電話の内容についていけなかったらしい。電話の向こうでは「はー」だとか、「ほー」なんて口になっている。よっぽど驚くことだったのだろうか。」

「それにしても驚いたなあ。まさかそっちから電話を掛けてくるなんて」

「ちよっと待ちなさい。先に電話してきたのはあなたでしょ？」

「何言ってるのよ、もう」

「あはは、すまん。こんな朝早くから」

「いいわ。もう起きちゃったしね。」

「というか、まさかそれだけのために電話を？」

「まあ、新年のあいさつを言うために、電話をかけるのは分からなくはないけど・・・」

「いや、癖でな。毎年のように初詣のお誘いの電話をかけていたんだよ」

「ああ」

「そういえば、毎年アキとセイと三人で初詣行っていたけど、私たち

を誘ってたのはいつもセイだったわね。

それが当たり前だったからこそ、全く気が付かなかったのかな。

「ごめんなさい。急に切ってしまって」

「いやいや！全然構わないさ。」

むしろ謝りたいのは俺の方だよ。君が入院していたのに電話を掛けてしまったってごめんよ」

「それは全然悪いことじゃないわ。毎回ありがとうね」

「おう！」

ん、自分でも気づいたが、この頃の私は前より素直になってきてないかしら。

悪いことじゃないんだけどね。

「じゃあ、俺はこれで」

電話を切ろうとするセイを慌てて引き留める。

「え？初詣行かないの？」

と問うと、彼の方も驚いた感じで

「え？外出許可降りたの？」

と返してきた。

今は、午前6時35分。確かに時間的にも早すぎる。

「あとからなら行けると思うけど。その時どう？」

「んー…許可降りるかなあ…」

セイはクリスマスの件で私から怒られた後、だいぶ反省したらし

い。

自分からお医者さんの方に謝りに行って、許してもらったとか。

「あの時は、時間超過で怒られたんでしょ？」

でも今度は大丈夫よ。午前中だけだし」

「いや、たぶんそれ違うと…。」

「え？違うの？」

初めて知った。というより、怒られてた時の話を全くと言ってもいいほど覚えていない。

なんて言われてたかしら、私。

んー、と頭をひねったり、首を回したりしているがなかなか出てこない。

「時間超過はもちろんだけど、弱ってる体であまり無理をさせたくないってのが、医者の言いたかったことだと思うよ」

「なるほど」

それはそうね。うん。言われていた気がする。

まあ、ちゃんと聞いていなかったし、仕方ないわよね。

「ど、いうことで、今度はちゃんと医者と話し合って決めることにするよ」

「そうね、分かったわ」

「うん、じゃあ、10時頃にね」

「はーい」

電話を切る。

携帯を枕元に置き、上体を起こして背伸びをする。

「んー。ってあれ？」

ふと気づいた。セイは10時って言ってたわよね。
もう一度携帯を開くと、まだ午前7時にもなっていない。
あと三時間以上もあるんだけど…

「小説の続きでも書いていこうかしら」

ベッドの上でうつ伏せになり、メモ帳を開く。
まだ物語の三分の一しか書き終わっていない。

「終わるのかしら、これ」

一応終わりまで考えているのだけれど、どうも執筆ペースが遅いように感じる。

割と昔のことまで鮮明に覚えている気がする。
それだけ刺激の強い日常だったことが分かる。

「少し真面目に頑張りますかね」

よし、と気合を入れ画面に集中する。

病室では、カタカタカタと音が鳴り響いていた。

*

「——い」

何か聞こえる。

「——おい」

まるで私を呼んでいるような…

「起きて」

「はっ」

がばっ！つと枕から顔を上げた私にセイは笑いながら話しかけた。

「すまん、早く起こしたから眠たかったんだろ？」

現状を把握する。私はいつの間にか眠っていたらしい。
携帯の液晶もOFFになっていて、中はばれていない。

「ごめんなさいね。つい寝てしまったわ」

「大丈夫。気にするなよ」

「それより今何時？」

「10時12分だよ」

もう10時を過ぎていた。

やはり、寝ると時間が過ぎるのが早いよね、と改めて実感する。

「あ、じゃあお医者さんに話しをしなきゃ」

体を起こして、身なりを整える。そしてお医者さんと呼んでもらおうと思ったのだが

「ああ、それならさつき話してきたよ

何時までとかじゃなくて、二時間だけならいいとさ」

「何かと優しいのね。あのお医者さん」

割とあっさり承認してくれるお医者さん。

自分の担当医はずいぶん気前がいいらしい。

「だな。じゃあ俺は廊下で待っておくから、その間に着替えてくれ」
「了解」

ドアからセイが出て行ったのを見て、今年初の服選びを始める。

「んー、初詣ならこの格好かしら」

おばあちゃんが家から持って来てくれた服を、布団の上に広げていく。

いろんな服を買っていたらしい。

(向こうではあまり服装を気にしなかったけど、やっぱり外へ出るときは正装をしなきゃね)

黒をベースとしたシャツと、動きやすいジーンズ。

茶色のコートを羽織って松葉杖を握る。

「この格好で皆と会うのかしら…」

早く、自分の足だけで歩けるようになりたいわ…」

少し、松葉杖が様になってきた自分を見るのが恥ずかしい。

早く松葉杖を卒業したいと、切に思う私であった。

セイと向かった神社はこの街の中で唯一の神社で、この時間帯は多くの人でにぎわっていた。

見あげるような大きな鳥居をくぐると、ずらーつとどこもかしこも人で埋まっている。

「お、いたいた。おーいー」

隣にいたセイが急に大声を上げる。

両手を振って誰かに話しているらしい。

「急にどうしたの？」

「ああ、お前と仲良かったやつ、呼んでおいたぜ」

セイが手を振っていた方向に顔を向けると、確かにそこには仲の良かった友達が揃っていた。

「お久しぶり！静」と遠藤 真希子

「元気そうね」と高峰 蒼

「心配したんだからね」と林田 響子

「お、皆ー！お久しぶりだね！」

こちらも「おーい」と片腕をブンブン振る。

そこにはいつもよく集まる友達が待っていた。

一番先に話しかけてきたのは、真希子ことマツキー。

割とガサツな性格だが、根はとても優しい子である。

「いやあ、事故にあつたつて聞いたときは驚いたよ。お見舞いには行っていたんだけどね。」

この頃行けなくてごめんよ」

「ううん。ありがとうね」

二番目に話しかけてきたのは、蒼。

彼女には学業の面でもお世話になっている。

「早く戻ってきなよ、待ってるわ。」

ノートはしっかり取ってあるからね。」

「ありがとう！頑張るよ」

最後は、響子ことキョウちゃん。
今日は少し大人っぽい服で来たのだろうけど、やっぱり幼く見える。

「元氣そうで嬉しいよ！でも無理はしないようにね？」

風邪ひいちゃうと辛いからね」

「うん、気を付けるね。ありがとう」

全員と言葉を交わしたところで、もう一人奥にいるのが見える。
少し影になっていて見えにくいのが、身長は150くらいの女の子だ
と思う。

「ん？誰あの子。初めて見たけど…」

その子は、こちらをじーっと見つめているが何も話そうとしない。

「あ、もう来てたのか。こっちに来いよ！」

どうやらセイの知り合いらしい。

それにしても見覚えのない顔だけど…

「はーい」

セイに呼ばれてこっちへ来た彼女は、すごく可愛くてびっくりした。
それこそ、顔が整っていてモデルが出来そうなくらいであった。

「初めまして、先輩。御堂 香織です」

「初めまして。私は、七星 静です」

「ええ、知ってます。知ってますよ？」

んー、少し突っかかってくる子だなあ。
私なにかしたっけ？こんな可愛い子に。
そんな感じで顔をしかめていると、彼女の方も慌てた様子で

「ああ、すみません。」

誠司さんの方から話は伺ってまして、前に一度病室に訪ねに来たことがあったんですよ」

なるほど。でもなにかしらこの違和感。

セイの事を先輩ではなく誠司さんと呼ぶあたり、まさかこの子…

「なるほど。お見舞いに来てくれたのね、ありがとう」

まあ、確定もしていないのに疑うのは良くないわね。

セイが呼ぶくらいだからそれ相応の仲なのだろう。

そう思っていると、彼女は急にキョロキョロと周りを見渡して

「誠司さん、誠司さん。はやく並びませんか？人が増えてきてますよ？」

「ああ、そうだな香織ちゃん。並んでおこうか」

「さ、行きましょー！」

彼女はセイに手を差し出す。

だが、セイはそれが見えてなかったのか、こちらに振り返り

「静も行くか」

と声をかけてくれた。

なぜか…少し嬉しかった。

少しばかり心が高ぶったのである。

「ええ、行きましようか。皆で」

今はまだこの優越感に浸ろうと思う。

ふわふわしたような感じ。

この時私は、この感情がなんなのかをまだ理解していなかった。

「今年のお願いは何にしようかしら?」

周りの皆で話をしながら列に並ぶ。

どうやら聞くとところによると、うちのリア充どもは今日は彼氏を呼んでいないらしい。

「彼氏と初詣行かなくても良かったの?」

詳しく聞いてみると、

「おう!夜中にもう行ってきたからね!」と、その割には眠くなさそうなマツキー。

「私の彼氏は友達と行ってきたらしくて、朝連絡したら寝てたのよね」と、顔をしかめる蒼。

遠くを見詰めて「いいな...」と、呟いたキョウちゃん。

あまりにもキョウちゃんが辛そうだったので「私も一人よ!同じじゃない!」と肩を叩いてフオローしてみるが、「あんたねえ...」とあきれられてしまった。

はて、何かしただろうか、私。

そんなふうには、きよとんとしていたのが気に食わなかったのか

「鈍感って罪よね」

と周りの皆に話しかけていた。

なんやかんや話をしていると、とうとう自分たちの番が来た。向こうの世界ではなかったたので、久しぶりのお参りだ。

お願いはもう考えている。

50円玉を財布から取り出し、お賽銭箱に投げた。

ほかの皆も続々に投げていく。

「ルーデウスが無事に過ごせますように」

一つ目はもちろんこれだ。自分を二度も救ってくれた恩人ルーデウス。

彼には返しきれないほどの借りがある。

そして、ずうずうしくも二つ目も考えていた。

「アキが幸せに眠りにつきますように」

現実世界でも未練を残して逝ってしまった彼は、向こうの世界に転生した後も満足せずに死んでいった。

そんな彼には、せめて死んだあとは安らかに過ごしてもらいたい。

そう思って、願い事を考えてきた。

「静はなんて言ったの?」

「ん? ああ、アキのことよ。」

これから安らかに過ごしていけるようにお願いしたの。

そういうあなたは?」

「毎年同じく、皆が幸せになれますように、だよ」

「あなたらしいわね」

セイが気になって聞いてきたが、一つ目は答えなくておく。

セイは毎年あのお願いしているらしいが、今年はお願している時

間がいつもより長かったような気がする。
きつと、去年いろいろあったからだろう。
いつもよりたくさんお願いしてきたに違いない。

「それじゃあ、帰りましようか」

時間的にもそろそろ帰らないといけないので、皆にそう告げる。
すると、まだ居たかったのか、口々に「えー」と文句を言ってきた。

「誰かさんのせいでね、時間厳守しなきゃいけないのよ」
「ごめん！ごめんって！」

セイの慌てっぷりにはみんな笑っていた。

「それじゃあ、またね〜」

手を振って振り返り、病院へと戻る。

その時セイが「あ、俺も」と言っていたが、どうやら後輩の女の子に捕まったらしい。

「誠司さんはごつちです」と引きずられていく様子が横目で見れた。

「ほんと、何やってんだか」

独り言のように呟いたとき、胸の奥の方が『チクリ』と痛みを感じた。

「あ… そっか…」

やっと、分かった。

セイに対する自分の気持ちだ。